

中国宋代の兵士と公共墓地

與 座 良 一

はじめに

本稿では、中国宋代（北宋九六〇―一二二七年・南宋一二二七―一二七九年）の兵士について、当時普及した公共墓地「漏沢園」を通して見ていきたい。

漏沢園は北宋の元豊二年（一〇七九）、時の皇帝第六代神宗が畿内に設置させたのが最初とされる。^①その後崇寧三年（一一〇四）、第八代皇帝徽宗は全国の州県に対して高台不毛の地を選んで漏沢園を開設し、遺族が貧困のために埋葬できない死者や長年暴露したままの遺骨を埋葬するようにとの詔勅を下す。^②したがって漏沢園は王朝国家によって設置された公共墓地であり、死者を埋葬することができない貧しい兵士や人民のため、或いは無縁仏を葬るために設けられた施設であった。^③

そして近代中国になると、発掘調査によって漏沢園の実態が次第に明らかになってきた。ここでは副葬された磚墓誌によって被葬者の身分などが判明している。その結果、漏沢園には多くの兵士が埋葬されていたことが確認された。本稿では、とくに遺骨とともに出土した磚墓誌の記載内容を基に、埋葬された宋代兵士の実像に迫っていきたい。

宋代兵士がどのような経緯を経て一般人民とともに漏沢園に埋葬されるに至ったか考察することは、兵士が中国

社会の一員としてどのような存在であったのか確認することにつながる。シンポジウムのテーマに沿って言えば、中国社会では兵士の死をどのように悼んでいたのか考える試みとなる。

中国では一九六〇年代以降、各地で宋代の漏沢園の痕跡が発見され始めた。⁽⁴⁾とくに一九八五年以降、河南省三门峡市（宋代の陝州）で発掘が進められた陝州漏沢園からは多量の磚墓誌が出土する。陝州の漏沢園が発見されるまで、漏沢園は文献史料の記載から宋代の救済制度の一つとして考察が加えられてきた。⁽⁵⁾そこでは史料の制約上、制度の沿革の考察と制度施行の背景となる社会状況の推察を行うに止まり、漏沢園に葬られる被葬者にまで論が及ぶことは少なかった。ところが各地の漏沢園の発掘が少しずつ始まり、そうして陝州漏沢園で多くの被葬者の職業身分が明らかになると、最も多数を占める兵士に注目が集まった。⁽⁶⁾ここで発掘報告書から、陝州漏沢園の概況を紹介しておこう。⁽⁷⁾

一九八五年、九三年、そして九五年の三回にわたって調査が行われた陝州漏沢園は、三門峡市の緩やかな傾斜地の上にあり墓地の総面積が一万二千六五〇平方メートルと推定され、うち三千八〇〇平方メートルが発掘された。調査された八四九座の墓のうち二三八座から三七二点の磚墓誌が発見されている。それぞれの墓には千字文や干支によって番号が付けられており、各磚墓誌には墓の番号をはじめ死者の姓名・年齢・身分・死亡場所・埋葬の年月日などが記載される。これは漏沢園の設置規定に沿うものである。⁽⁸⁾そして磚墓誌の記載内容から以下の点が明らかになった。陝州漏沢園の使用期間は、少なくとも徽宗の崇寧四年（一一〇五）から政和六年（一一一六）までの二年間。被葬者の年齢は九歳から八二歳。そして被葬者の職業身分が明記された磚墓誌は一五八点あり、そのうち兵士の磚墓誌が一〇七点を占める。宋代の兵士は戦闘に従事する禁軍、主に雑役に従事する廂軍が主体であった。彼ら禁軍と廂軍は、家属ともども国家によって養われる兵士である。陝州漏沢園で兵種が明らかな者は禁軍が三二人、廂軍が四五人であり、平均年齢は禁軍兵士三五・八歳、廂軍兵士三六・七歳であった。⁽⁹⁾したがって本稿で考察

の対象とする宋代兵士は、禁軍或いは廂軍兵士が中心となる。

一 兵士の磚墓誌の特徴

次に本稿の視点から、兵士の磚墓誌の特徴と思われる点を二つ述べておきたい。

まず一つが「不知姓名軍人」と記載された姓名不詳の兵士の磚墓誌があることである。例えば発掘報告書にM0271という整理番号の付された磚墓誌には、「空字号。陝州城の東部地区で死亡した姓名不詳の兵士。年約四十六七歳。崇寧五年（一一〇六）十二月二十七日、埋葬した（M0271）空字号。城東廂身死、不知姓名軍人。年約四十六七歳。崇寧五年十二月二十七日、葬埋訖」とある。これに対して姓名不詳の一般民の場合、「不知姓名百姓」、「不知姓名貧子婦人」というように、外見から職業身分の判断できない一般人民は「百姓」・「婦人」などと記載されている。つまり行き倒れになった名も知れない遺体であっても、兵士であることは判別できた。これは今泉牧子氏が指摘するように、宋代兵士の顔面などには入れ墨が施されていたためと考えられる。南宋の法医学書と言われる『洗冤集録』には次のようにある。

先ず遺体に軍号が有るか無いか、こめかみや顔面に入れ墨した文字の大小、何行・何字であるかを数え、いづれの軍人かを確認する。⁽¹²⁾

顔面に入れ墨には、軍号すなわち所属する指揮の名称が施されていた。指揮とは宋軍の編成の基本単位であり、一指揮の兵員は二五〇人から五〇〇人程度であった。⁽¹³⁾しかし発掘された磚墓誌には「不知姓名軍人」と記されているのみで所属する指揮名の記載はない。これは入れ墨が不鮮明であったか、あるいは今泉氏の言うように逃亡した兵士が自ら入れ墨を消したため、その痕跡によって兵士と判別された結果と思われる。⁽¹⁴⁾M0161の磚墓誌は「不知軍分兵士⁽¹⁵⁾」と兵士の所属が不明であると明記している。

逆に姓名の明らかな兵士の磚墓誌には、所属はもちろん入れ墨からは知り得ない兵士の情報が記載されている。これが二つ目の特徴である。その内容は、①所属指揮、②身分、③姓名、④年齢⁽¹⁶⁾、⑤出身地、⑥配置転換前の所属などである。いくつか事例を挙げておこう。

M0110 露字号。雍丘県雄武第十六指揮^①兵士^②丁德^③。年二十八歲^④、於城東廂身死。十一月十二日、檢驗了当。

十三日、依条立峯、葬埋記識訖。

M0144 潜字号。磁鍾通鋪^①兵士^②李菜^③。年約三十七八^④、係青州人事^⑤、改刺到鋪⁽¹⁷⁾。十二月十□、檢驗了当。十二月十六□、以条立峯、葬埋記識訖。

M0133 李字号。保捷第十五指揮人孫貴^①。年約四十五六^②、係府界陳留県広勇第七指揮改刺營^③。十二月初三日、

檢驗了当。十二月初四日、依条立峯、葬埋記識訖。

上記の情報のうち、指揮名以外は入れ墨に記されない⁽¹⁸⁾。指揮名以外の情報は、別の情報源に拠らなければならない。宋代兵士の姓名や出身地等の事項が記載されるものと言えば、一般人民の戸籍とは別に作成された宋代兵士の兵籍である。すなわち、宋代の兵士は顔面の入れ墨と兵籍によって管理される一般人民とは区別された存在であった。この区別が漏沢園の磚墓誌にも反映され、編戸「百姓」とは別個の「兵士・軍人」として記載されることになったのだろう。そこで行き倒れになった名も知らない遺体であっても、入れ墨の痕跡から兵士と判別できれば「不知姓名軍人」と記載されたのである。蘇軾は言う。

兵と民は分かれて、兵は二度と民となることはできず、ここに老弱の兵卒が存在することになった。妻子と家屋は軍營の中にあり、姓名は官府の籍に記されているので商人や農民になることはできない⁽¹⁹⁾。

二 兵士と社会の関わり

前節で見たように、宋代の兵士は一般の民と区別される存在であった。しかしながら、この事実が直ちに宋代兵士の社会からの孤立を意味するわけではない。そこで次に兵士と社会の関わりについて見ていきたい。

蘇軾の言には「兵は二度と民となることはできず、ここに老弱の兵卒が存在することになった」とあった。漏沢園のM0102碑墓誌には廂軍兵士の年齢が七十二歳、M0232の兵士は約八十二歳と記載されている。⁽²⁰⁾宋代の規定では、禁軍は七〇歳、廂軍は六五歳で除籍されることになっていた。⁽²¹⁾M0232の兵士は恐らく廂軍兵士と思われるが断定できない。仮に禁軍であったとしてもすでに除籍の年齢は越えている。除籍されていないとすれば、高齢になっても兵籍に付けられ兵役に縛られていたことになる。一方で見方をかえると、宋朝国家は年老いた兵士の生活もみていたということになる。『夷堅志』は除籍された老兵の境遇を次のように記している。

興国軍の民、熊二は生まれつき道理に悖る人物であった。熊二の父、熊明は軍卒であり、年老いて除籍され、自らでは生活を営むことができず、妻も早くになくなり、ただ子を頼みとしていた。しかし熊二は父を他人のように扱い、熊明は乞食をするようになった。⁽²²⁾

つまり兵籍に付けられて兵士となることは、国家から生活の保障を得ることにもなるのである。従来からよく知られているように、災害によって流民が発生すると、政府は彼等の中から成年男子を選んで兵士にすることで社会不安を取り除こうとした。京東路安撫使を務めていた富弼は次のように上言している。

わたくしは、近ごろ河北の洪水によって京東路に流入してきた農民三十餘万人が死に瀕しているのを憐れみ、また彼等が盗人となるのを防ぐため、強壮な者を募って廂軍兵士としました。⁽²³⁾

当時の為政者には民を兵士とすることで失業から救うという認識があった。⁽²⁴⁾一方、民の側でも生活の糧を得るため

兵士となる必要がある場合があった。『夷堅志』には兵士であつた亡き夫に代わつて息子を兵士とするよう懇願する妻の姿が描かれている。

（官船の船頭だつた）夫が死んだため舟を官に返還しなければならず、一家は物乞いをするようになります。もし長男が兵役を継ぐことが出来れば、食をつなぐことができるのです。⁽²⁵⁾

このように、兵士となること或いは兵士となすことは、兵士となつた者の生活を保障することに繋がつた。そして富弼が流民を兵士とする理由について「彼等が盗人となるのを防ぐため」と述べているように、社会の治安維持を図るために兵士とする場合があつた。宋代には犯罪者など不平分子を刑罰として廂軍に編入する配軍刑の制度がある。⁽²⁶⁾漏沢園では配軍によつて陝州の地で命を落とした兵士の磚墓誌が確認されている。⁽²⁷⁾特に配軍刑に処された罪人が配属される指揮を牢城という。漏沢園では牢城兵の磚墓誌も確認されている。一例を挙げると、M0530の牢城兵士王俊は、亳州（現在の安徽省亳州市）から陝州と黄河を挟んで対岸に位置する解州（黄河北岸、現在の山西省運城市）に配軍され、陝州にある公共の医療施設安濟坊で亡くなっている。

M0560 甲子武。使衙判送下在州安濟坊状、擡昇到亳州斷配解州牢城指揮王俊。正月初三日收管、当日葬埋訖。犯罪者は罪の重さに従つて、判決を受けた州からより遠くの地に配軍された。⁽²⁸⁾亳州から陝州までの距離を宋人がどのように認識していたかは不明である。ただ国都開封と各州との距離は知ることができる。『元豊九域志』巻三、解州条、同巻五、亳州条によれば、亳州から開封までの距離は四〇五里、解州から開封までの距離は七一五里ある。そこで開封經由で亳州から解州までの距離は一一二〇里となる。漏沢園の磚墓誌は、配軍の制度を考える上でも一助となるかもしれない。

ところで、牢城兵は雑役に従事する廂軍の一種であるが、廂軍兵士は雑役に従事するために大規模な公共事業や公的機関・施設での任務に際し、民とともに労働に当たることも多くみられた。例えば漏沢園磚墓誌には河清軍兵

士のものがある。

標本採²⁸ 甲子敵。□頭子、擡舁□軍河清指揮□張德。二月三□、□驗了当、当日葬埋訖。

河清軍は河川管理を専門とする廂軍の一種である。河清軍やその他の廂軍兵士は、しばしば民とともに治水に当たっていた。³⁰ また、兵士は民のために開設された公共の医療施設である安済坊や養老育児施設の居養院でも使役された。³¹ そして、兵士自らもM0550の牢城兵士王俊のように安済坊に收容され、一般の人々とともに漏沢園に埋葬されたのである。³²

おわりに

宋代の兵士は顔面の入れ墨と兵籍によつて管理される存在であり、一般人民とは区別される。そこで兵士は漏沢園に埋葬される際も副葬される磚墓誌に「兵士」・「軍人」などと記載され、編戸「百姓」とは区別された。また蘇軾が「妻子と家屋は軍³³營の中³⁴にあり」と述べているように、兵士は周囲に障壁を廻らした軍營とよばれる空間の中で生活していた。つまり兵士は空間的にも人民と区別されていたのである。一方で宋朝国家は社会の安定を図るため流民や犯罪者を兵士にし、民の側でも日々の糧を得るため兵士となることがあった。そして彼ら兵士と民はともに雑役に従事することもあり、最終的に兵士と人民はともに漏沢園に埋葬された。公共墓地漏沢園が無縁仏や貧しい民とともに兵士をも受け入れた事実は、兵士と一般人民がともに中国社会を構成する一員であることを示しているとも言えるだろう。

註

(1) 『続資治通鑑長編』(以下『長編』と略称) 卷二九七、

元豐二年三月辛未

又詔、開封府界僧寺、旅寄棺柩、貧不能葬、歲久暴露。

其令逐県、度官不毛地三五頃、聽人安葬、無主者、官為瘞之。民願得錢者、官出錢貸之、每喪毋過二千、勿收息。至六月、〔陳〕向又乞、選募僧守護、量立恩例。並從之。葬及三千人以上、度僧一人、三年与紫衣、有紫衣与師号、更令管勾三年、願再住者準此。

- (2) 『宋会要輯稿』(以下「会要」と略称) 食貨六八一三〇、恩惠〔恤災〕、崇寧三年二月三日

中書言、州県有貧無以葬、或客死暴露者、甚可傷惻。昨元豐中、神宗皇帝、嘗詔府界、以官地收葬枯骨。今欲推広先志、拓高曠不毛之地、置漏沢園。凡寺觀寄留輜積之無主者、若暴露遺骸、悉瘞其中、県置籍、監司巡歴檢察。從之。

- (3) 『会要』 食貨六八一三〇、恩惠〔恤災〕、崇寧三年二月四日

中書省言、諸以漏沢園葬瘞、県及園各置図籍、令斤置櫃封鎖、令佐替移、以図籍交授、監司巡歴、取図籍点検。応葬者、人給地八尺・方輒二口、以元寄所在、及月日・姓名、若其子孫・父母・兄弟、今葬字号・年月日、悉鐫訖版上、立峯記識、如上法。無棺柩者、官給以葬。而子孫・親属識認、今乞改葬者、官為開葬驗籍給付。軍・民貧乏親属、願葬漏沢園者、聴指占葬地、給地九尺。無故若放牧、悉不得入。仍於中量置屋、以為祭尊之所、聴親属享祭追薦。並著為令。從之。

- (4) すでに一九五〇年代より漏沢園に関連すると思われる発見がある。一例を挙げると一九五六年、山西省では漏沢園の磚墓誌と思われるものが発見されている(楊紹舜

「呂梁県発見した罐葬墓群」『文物參考資料』六、一九五九。しかしこのような磚墓誌が漏沢園のものと認識され始めるのは、六〇年代に入ってからである。例えば一九六六年、何正璜氏は陝西省岐山県で一九六〇年に出土した磚墓誌を漏沢園のものと指摘している(何正璜「宋無名氏墓磚」〔『文物』一、一九六六年〕)。

- (5) 福沢与九郎「宋代助葬事業小見」(『福岡学芸大学紀要』七、一九五七年)。梅原郁「宋代の救済制度」(『都市の社会史』ミネルヴァ書房、一九八三年)。

- (6) 今泉牧子「從漏沢園墓誌銘看国家和家族」(『中国社会歴史評論』五、二〇〇七年)。齋藤忠和「漏沢園が語る徽宗時代の下層兵士たち」(『道歴研年報』八、二〇〇八年)。のち「宋代募兵制の研究」勉誠出版、二〇一四年所収。崔松林「從陝州漏沢園墓誌看北宋兵士の勞役情況」(『三門峽考古文集』中国檔案出版社、二〇〇一年)。寧文閣「從陝州漏沢園看宋朝的招刺・刺配制度」(『三門峽考古文集』中国檔案出版社、二〇〇一年)。淮建利「北宋陝州漏沢園土兵墓誌文研究——以番号墓誌文為中心」(『中国史研究』一一、二〇一三年)。

- (7) 三門峽市文物工作隊「北宋陝州漏沢園」(文物出版社、一九九九年)。

- (8) 設置規定については、前註(1)～(3)を参照されたい。
(9) 職業身分、兵士数などは前註(7)三門峽市文物工作隊、前註(6)今泉氏・齋藤氏・淮氏を参照。

- (10) (M0253) 羔字号。磁鍾通鋪頭身死、不知姓名百姓。年約六十四五歳、十一月十四日、檢驗了当。十一月十五

日、依□立峯、葬埋記識訖。

- (11) (M012) 崗字号。不知姓名貧子婦人。年約五十七八、於城東廂張祐店前身死。十一月二十二日、□驗了当。二十三日、依条立峯、葬埋記識訖。

- (12) 宋慈『宋提刑洗冤集錄』卷二、驗未埋瘞屍

先看其屍有无軍号、或額角・面臉上、所刺大小字体、計幾行、或幾字、是何軍人。若係配隸人、所配隸何州軍字、亦須計其行數。如經刺環、或方或円、或在手背・項上、亦計幾個。内是刺字或環子、曾灸灸或用藥取、痕跡黯濛、及成疤癰、可取竹削一篋子、於灸処撻之可見。

- (13) 王曾瑜『宋朝軍制初探(增訂本)』三九頁(中華書局、二〇一一年)。

- (14) 消した入れ墨を確認することが『洗冤集錄』に記載されている(前註(12))。また逃亡兵が入れ墨を消したことにについては、今泉氏を参照(前註(6))。

- (15) (M0161) 衣字号。不知軍分兵士張德。年約五十二、城東廂楊家店内身死、十二月二十七日、檢驗了当。十二月二十八日、依条立峯、葬埋記識訖。

ここで言う「軍分」とは兵士の所属を意味している。用例として左に『長編』の記事を挙げておく。

『長編』卷四七四、元祐七年(一〇九二)六月癸亥

詔、陝西・河東路就糧禁軍人員節級、囚犯私罪、降充本城牢城指揮、内選年五十以下・武藝不退・堪任戰鬪人、權分隸元軍分額外收管、支廂軍請受。遇有事、宜隨軍差使、候有戰功、量輕重、特与禁軍内比附旧職等第安排。從枢密請也。

- (16) 年齢の場合、「約」何歳と約字の付いているものは、

姓名不詳の兵士の磚墓誌にもある。したがって「約」字のついた年齢は、相貌から判断された可能性も排除できない。

- (17) M014は州名のための記載であるが、M013の磚墓誌は、被葬者の出身地を「鳳翔府天興県」と県名まで記す。

(M0134) 奈字号。壕寨司寄役逃軍王信。年約三十四五、係鳳翔府天興県人。於東門通鋪身死、十二月初三日、檢驗了当。十二月初四日、依条立峯、葬埋記識訖。被葬者は王信という人物である。彼は軍を逃亡した罪で壕寨司という官署に配役されていたとみられる。また壕寨司は土木建築を掌る官署と思われる(『資治通鑑』卷二八八、乾祐元年(九四八)三月癸酉条胡三省注「壕寨使、掌營造浚築、及次舍下寨」)。

- (18) 王氏前註(13)二七一〜五頁。

- (19) 蘇軾『經進東坡文集事略』卷一八、進策別下、練軍策第一六

及至後世、兵民既分、兵不得復而為民。於是、始有老弱之卒。夫既已募民而為兵、其妻子屋廬、既已托於營伍之中。而其姓名、既已書於官府之籍、行不得為商、居不得為農。而仰食于官、至于衰老而無婦、則其道誠不可以棄去。是故、無用之卒、雖薄其資糧、而皆廩之終身。

また『建炎以來繫年要錄』によれば、兵籍には本籍地などが記されていた。

『建炎以來繫年要錄』卷一一八、紹興八年三月甲辰(向子諲)又言、今天下急務、在考兵籍。就戸版、汰

老弱、升勇健、創簿正名、使諸軍上帳於兵部、諸將上帳於枢府。著鄉貫、書事藝、季申歲考、所以除詐冒也。

- (20) (M0102) 律字号。侯進。年七十二歳、係本府三門水軍營兵士。十一月一日、檢驗了当。二日、依条立案、葬埋記識訖。

(M0232) 談字号。本府三門西山河匠指揮兵士翟政。年約八十二歳、九月十九日、檢驗了当。九月二十日、依条立案、葬記識訖。

- (21) 齊藤忠和「北宋の剩員・帶甲剩員制について」(『立命館史学』八、一九八七年。のち『宋代募兵制の研究』勉誠出版、二〇一四年所収)。

- (22) 洪邁『夷堅志』支甲志卷三、熊二不孝
興國軍民熊二、稟性悖戾。父明為軍卒、年老去兵籍、不能營生理、妻又早亡、惟恃子以為命、而視如路人、至使乞食。：

なお、興國軍は地名であり、ここで言う軍は州の一種。現在の湖北省陽新県である。

- (23) 馬端臨『文獻通考』卷一五六、兵考八、郡国兵、鄉兵
仁宗皇祐中、京東安撫使富弼上言、臣頃、因河北水災、農民流入京東者、三十餘万、臣既憫其流死、又防其為盜、遂募伉健者、以為廂兵。既而選尤壯者、得九指揮、教以武技、已類禁軍。今止用廂兵俸廩、而得禁軍之用、可使効死戰鬪、而無驕橫難制之患。此当世大利也。

- (24) 『宋史』卷一九三、兵七、召募之制
仁宗天聖元年、詔、京東西・河北・河東・淮南・陝西

路、募兵当部送者、刺指揮二字、家屬給口糧。兵官代還、以所募多寡為賞罰。又詔、益・利・梓・夔路、歲募民充軍士、及數即部送、分隸奉節・川効忠・川忠節。於是、遠方健勇、失業之民、悉有所歸。

- (25) 『夷堅志』乙卷三、舟人王貴

紹興三十一年、舟師王貴者、病死於楚州洪沢。有二子。其妻泣告(黄)述曰、夫死、舟当還官、則一家數口、且浜溝壑。儻得長子繼役、乃可統食矣。願丐一言於漕使。述許之。還至鎮江、与漕遇、伸其請、即日刺為兵以代貴。

- (26) 配軍刑については、辻正博『唐宋時代刑罰制度の研究』第六章(京都大学学術出版会、二〇一〇年)を参照。

- (27) (M0163) 推字号。通送配軍番部遇厄。年約四十六七、城東廂郭再立店內身死。十二月二十八、檢驗了当。十二月二十九日、依条立案、葬記識訖。

(M0356) 甲子賤字号。高郵軍配軍嚴志、閏十月初三日、葬埋訖。

- (28) 辻正博氏によれば、配軍の距離は判決を受けた州を起点として最も重い順に、配沙門島・配広南遠惠州軍・配広南・配三千里・配二千里・配千里・配五百里・配鄰州・配本州となっている(辻正博『唐宋時代刑罰制度の研究』二五九頁(京都大学学術出版会、二〇一〇年))。

- (29) 標本採は発掘調査の結果、副葬された墓が不明であった磚墓誌。

- (30) 『長編』卷三二二、元豐四年(一〇八二)五月己丑
馬軍副都指揮使燕達、都大提拳河北軋運副使周華言、小吳埽決、本州雖已發急夫六千人修塞、統於鄰近差夫兵、

及舟運新芻、其所役人数亦少。乞許發近便州軍役兵、及於諸埽輟河清兵、併力興功。從之。

五月己丑はもと己酉に作る。中華書局標点本校勘記に従い改める。なお『会要』は四月二八日に作る（『会要』方域一五・六、治河下二股河附）。

(31) 『宋史』卷一七八、食貨上六、振恤

崇寧初、蔡京当国、置居養院・安濟坊、給常平米、厚至数倍。差官卒充使令、置火頭具飲膳、給以衲衣絮被。

『会要』食貨六〇・一・二、恩惠、居養院・養濟院・漏沢園等雜錄、嘉泰元年（一二〇一）三月一日

和州言、以本路提举韓挺申請置居養院。乞、…輪差僧・行各一名、主掌点檢粥食、分差兵士充火頭、造飯・煮粥・洒掃・雜使・把門・使喚。…從之。

(32) 安濟坊に収容された兵士の磚墓誌は、M0550の牢城兵

士王俊以外も確認されている。幾つか事例を挙げておこう。

(M0139) 乃字号。安濟坊寄留身死兵士董成。年約五十

一二、係東京第一将下広捷第二十一指揮。十二月二十六日、檢驗了当。十二月二十七日、依条立峯、葬埋記識訖。

(M0418) 戊辰式字号。使衙判送下在州安濟坊、擡到解州蓮花鋪兵士李忠。大觀二年正月十九日、葬訖。

(M0448) 甲子画字号。使衙判送下在州安濟坊状、擡昇到陳州牢城第五指揮兵士王吉。四月十三日収管、当日葬埋訖。

(33) 久保田和男「宋都開封と禁軍軍營の変遷」（『東洋学報』七四・三・四、一九九三。のち『宋代開封の研究』汲戸書院、二〇〇七所収）。